

11.「石狩川」(流城市町村)

大雪山系を源とし、上川、空知、石狩の大平野を形成して日本海に注ぐ大河川。北海道開拓の歴史の中で、度重なる洪水と闘いながらも、交通・物資輸送の道として大きな役割を担い、また鮭漁など北海道の歴史と文化が刻み込まれている母なる川。河口の石狩市では平成14年から、鮭地引網漁の技術と文化を次の世代に伝承する事業を実施している。



12.「江別のれんが」(江別市)

開拓使は内陸開発建築資材にれんがを奨励し、道内8地区17の工場で作られたれんがによって、北海道庁赤れんが庁舎をはじめ多くの名建築が生まれた。大正以降、全道一の陶土地帯である江別の野幌周辺へとれんが製造の中心が移り、現在も3つの工場が稼働している。市内には小学校やサイロ、民家など400棟以上のれんが建築物が美しい姿で現存している。



13.「北海道大学 札幌農学校第2農場」(札幌市)

第2農場に残る模範家畜房および穀物庫は明治10年に建設された北海道大学でも最古の施設群で、1戸の酪農家をイメージした日本農業近代化のモデルとしてクラーク博士により構想された。内部に展示されている農業機械群は、明治初期の農場開設時の輸入機械をはじめ、近代農業史を語る貴重な資料である。春から秋には一般公開も実施されている。



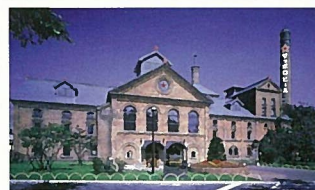
14.「開拓使時代の洋風建築 (時計台、豊平館、清華亭など)」(札幌市)

札幌市時計台や豊平館は、北海道開拓の初政をになった開拓使の事績を伝え、文明開化の先端をいった北海道の気風をよく表わしている。時計台は札幌のシンボルであり、近年は2階ホールが音楽会などの場として親しまれている。明治初期の洋風建築は和洋折衷型も含め、工業局庁舎、清華亭、永山邸、札幌農学校の農場建築などが遺されている。



15.「札幌苗穂地区の工場・記念館群」(札幌市)

札幌市の創成川以東は、豊平川の伏流水や貨物輸送の利便性などによって明治期から「産業のまち」として栄え、今も福山醸造をはじめ、さまざまな工場や倉庫がひしめき、下町的な雰囲気を残している。苗穂駅近隣にある北海道鉄道技術館、サッポロビール博物館、雪印乳業史料館は内容も充実し、北海道の産業史を知る上でも貴重な記念館群を形成する。



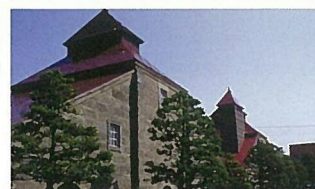
16.「小樽みなとと防波堤」(小樽市)

「港湾工学の父」広井勇により建設された北防波堤は、セイロン(現スリランカ)のコロンボ港防波堤を参考にし、独特の傾斜ブロック工法を採用した日本初の長大堤防。ケーソン法を取り入れた南防波堤とともに、今も現役で機能する。防波堤に守られた小樽みなとは北海道移住の玄関口となり、また物流拠点、貿易港として、商都・小樽の繁栄を支えた。



17.「ニッカウキスキー余市蒸溜所」(余市町)

理想のウイスキーづくりをもとめた竹鶴政孝は、澄んだ空気と夏でもあまり気温の上昇しない気候に加え、近くに良質なビートに恵まれた余市をその適地として選んだ。ニッカウキスキー余市蒸溜所は昭和11年、ポット STILL に火が点じられてモルトウイスキーの製造が開始されて以来、当時と変わらない製法でウイスキーの蒸溜、貯蔵を行っている。



18.「積丹半島と神威岬」(積丹半島)

積丹半島開発の歴史は古く、ニシン漁の旧大漁場として発達した。切り立った断崖とジャコタンブルーと形容される神威岬の海岸美は絶景。貴重な自然と産業の古い歴史に加え、明治から昭和初期に築えた旧ニシン場の遺構として番屋、揚場跡、袋洞、トンネル、旧街道などが保存されている。神威岬の全面禁煙など景観を保護する活動も始まっている。



19.「京極のふきだし湧水」(京極町)

蝦夷富士「羊蹄山」に降った雨や雪解け水が濾過され、地中のミネラルを加えながら50~70年という長い時間を経て流れ出る恵みの湧水。「京極のふきだし湧き水」は国内最大級の湧水で、1日の湧水量は8万トン、30万人の生活水に匹敵する。1985年、環境庁の「名水百選」にも選ばれ、この自然が与えてくれた、おいしい水を求めて訪れる人が絶えない。



20.「スキーとニセコ連峰」(ニセコ地域)

厳しい寒さや雪に閉ざされる北海道の人々にとって、冬期間の最大の娯楽はスキー遊びだった。昭和40年代頃からは「冬のレジャー」と言われるようになり、スキー場の代表格が昭和初期から知名度の高かったニセコ連峰。娯楽が多様化した今日、ウィンタースポーツだけではなく、四季を通しての新しいアウトドアスポーツの拠点となっている。



21.「北限のブナ林」(黒松内町)

ブナは温帯を代表する樹種で、北海道では渡島半島だけに分布する。黒松内はその北限で、太平洋側の長万部と日本海側の寿都を結ぶ黒松内低地帯が境界線。北限のブナ林では、自然の恵みを伝える自然学校の開設など、ブナ林の役割を考える取り組みが進められている。また、渡島の七飯町には幕末に在住したドイツ人ガルトナーの植林したブナ人工林が残る。



22.「昭和新年国際雪合戦大会」(壮瞥町)

子どもの遊びを、大人が真剣に競う冬のスポーツとして確立したことは、雪国・北海道にふさわしい新しい文化といえる。ルール・用具の開発から、資金集め、企画運営まで地域住民が主体となって進められている。平成元年に始まった大会の歴史の中で、まちの若者たちの情熱とアイデアは海を渡り、今では北欧など海外でも「YUKIGASSEN」が開かれている。



23.「登別温泉地獄谷」(登別市)

地獄谷は北海道を代表する温泉地・登別温泉最大の源泉。直径450mの谷底には大地獄を中心に15の地獄があり、毎分3000ℓが湧き出している。登別温泉は「温泉のデパート」と形容され、11の泉質が湧出しており、これは世界的にも珍しい。地獄谷の周辺には表面温度が40~50度になる大湯沼、頂きから白煙が立ち上り、高山植物の名所としても知られる日和山、登別原始林などが広がる。



24.「内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群」(函館市、伊達市など)

内浦湾沿岸は北海道と本州を結ぶ縄文文化の交易路で、函館市(旧南茅部町)には集落規模としては国内最大級の古船遺跡など89カ所の遺跡、精巧な漆塗り製品など400万点を超える出土品がある。伊達市の北黄金貝塚は、縄文早期(7000年前)~中期(6000~4000年前)の遺跡で、住居や全国的にほとんど例のない「水場の祭祀場」が発見されている。

